





叙

狗是歌也為騷為俳
鳥辟諸狗是詩也
為詞鳥為曲馬夫
俳亦賦也俳耶俳



那歎之地感鬼神者
皆耶當今之時善
能者吾唯知遜窩
隱君子也言唯吾
志之闔國稱之言唯

闔國稱之四方咸稱
之凡言之於世也不
涉詭秘不墜淺陋
轉俗為雅觸類而
散使讀者一唱三嘆

絕倒稱善矣實真篤
子之弟一義也頃有
知樂舍主人者名願
好俳常從公遊因輯
公所作錄成冊子將

附剖劄氏余聞之
喜甚既而嘆曰嗟
公本^人藩良家也其
先生北^條中氏弼橫
井氏祿^子右職

歷參政不為不貴也
少壯留意武子靡
伎不習並鑄其好
而詩書之因也自聖
經史傳諸子百家

以至野史家言而得
官小稅困不為羅搜
常單究其閑奧也
是今之世不多覩焉
然數僅其情入彀

得闕是以唯知其
善能而已其則以
謂山人野客也此
其所以自樂而吾輩
所以深歎也今四方

讀此集者知公之
吾之稱也且知公之
矣非伎能之所能也
也此余所以歎一語
也

改并明字伯煥號
遜窩一號暮春水又
稱知雨亭主人又戲
號半掃菴或也有
雙或為羅隱字中年

因病致仕卜宅於
城南前津里居年
已近七十而顏色悅
澤胸臆不衰令嗣
藤瀨只今又為

冬多政云

明和丙戌冬十二月

張以潘未條堀田

方舊撰

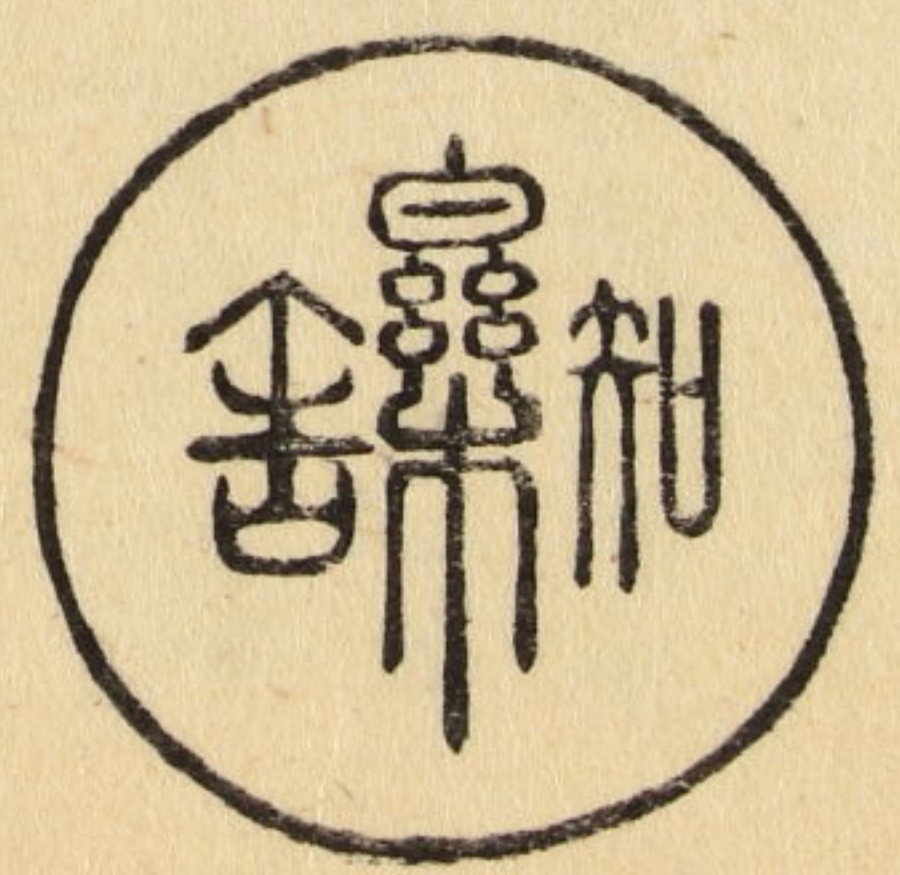
序

大凡物不平に鳴るゝハ韓愈の發明
かゝる。尾の翁隱君ハ治世の卒にふり
鳴り終ふる人ナリ。其の成り長
文に富み。官に志に疎足りて。勇に較ぶ
とも斬然とく。威に駭るともつゝ也。
余カに懶惰とそく。みよそのの於挫と
さや。其さひ。これに於ひあひて白く
梁の塵と動さるゝ事。石州
耳次傾けり。方家筆。其際。露と衛

年ありき。さうの中にさうして終くはの
に写して。海に波を遠くおの
予う耳よりさういふありて。毫釐よ
る情と模倣せり。さういふは
久し。幸に支丹樵の子。前々後々
之書に一千六百章と輯録して秘蔵
せしむ。あり。隠あは候す。是と合
せしむ。割願氏に所せん。中々傲志
中。いさうしてさういふ。始ハ
石満の色もはせし。頻ふとよ。

た多し。鼻を葉集と凱し。一
め和之川のみ。丙戌。合於秋
九月梓。備して世に。於
於。末の章。不。後。の。史。を
撰と侯の。

蘿葉集序
 挺之弱冠得見遯窩
 老君爾後辱布衣歡
 者二十有餘年矣頗
 諳其風度焉君吾



知樂令
 遠下

藩巨室也才居職為
政有賢者之稱齡過
半百致仕陷于城南
之野忘前日貴勢毫
無矜持之色似未嘗

有官者是其恭也清
齋為閒不施雕飾衣
食奉養唯取足耳不
好弄名傷無婢妾朝
夕給事者不過三五

人是其儉也。有來執
謂者不問長幼，不擇
貴賤，一以溫顏接之。
竟日不倦，是其和也。
唯談風月，不臧否人。

物是其慎也。素好俳
諧，林泉游賞之致，花
鳥視聽之娛，悉寓之
於此，是其適也。夫有
其一，猶足稱矣。況具

五者乎君之賢可知
向者有人揖君之平
目取詠名曰黃羅葉集
鏤梓以行于世而板
藏于家其人歿而板

六逸書肆苦無應
四才之需欲再刻
之謀諸君之侍史
文樵文樵授而授之
問序于余余謂君

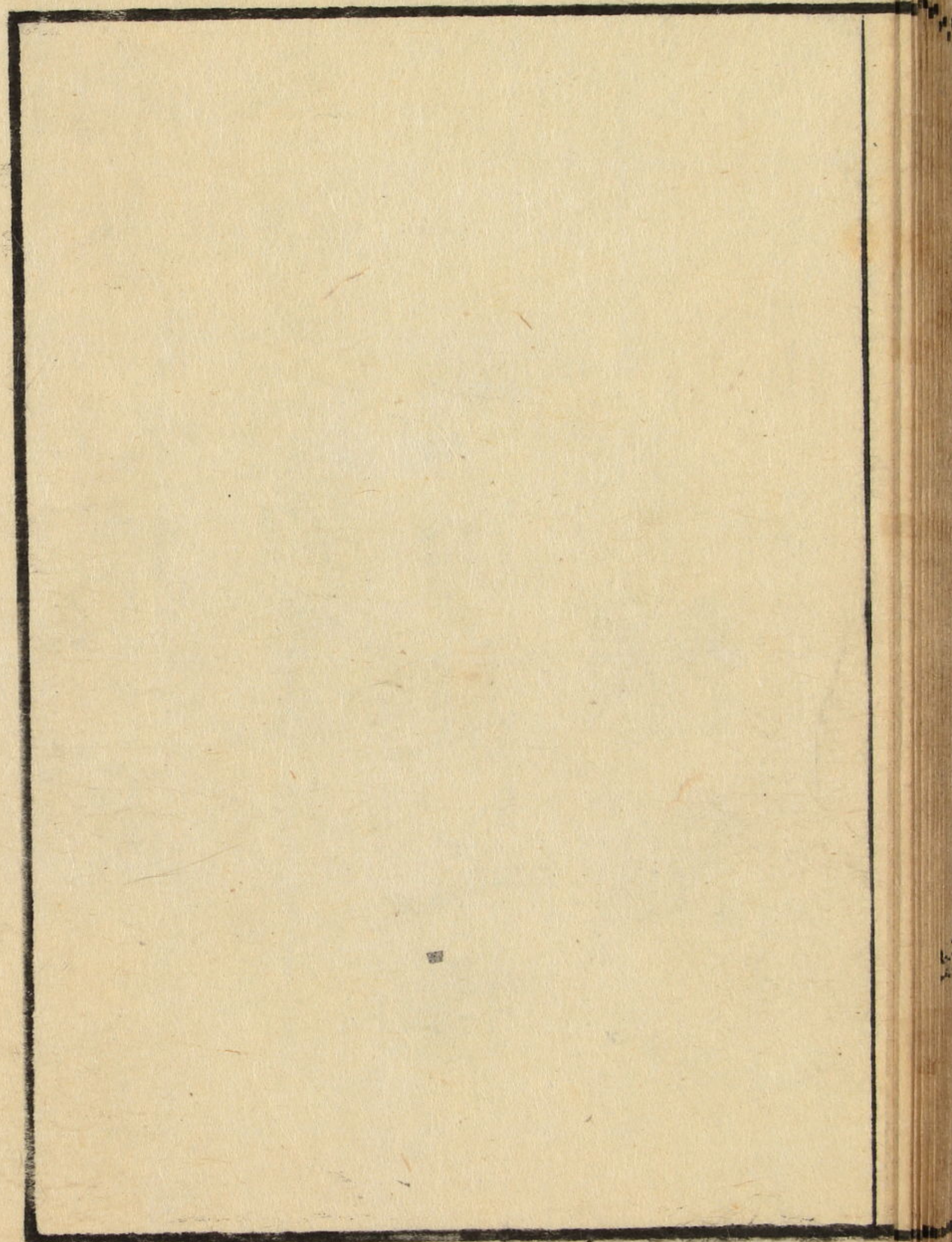
之匠心造語獨得
妙不可傳而誦之者
人不知之固無待
余言故叙其素少
以告遠方慕君之

風者如此

天明壬寅夏

岡田挺之撰





初編

半掃菴也有著

妻部

柱ももささげくさやうのし
 えりややう成ふむ人あくく
 茶もや波ハ教もくく世く
 和凡のさくやまを門くさり
 鬼と山く第いくえんもや
 下法の菌もやうく雪くく
 足くはくくさくさくさく
 下法

まつりハハの〜さん〜
 ころ菜のれ梅もふ髪はの根芥〜
 七州は呼はや味は喘はハハ〜
 七又もつむハ芥はに白はい〜
 磨もも七は呼は〜
 北ハハ〜
 小ハハ〜
 汝村〜
 脊は〜
 ハ〜の急ハ〜
 梅の〜

雪乃香気自折れハ〜
 卜詠の涯〜
 梅〜や耳〜
 雪〜けや梅の菱場〜
 凍〜けや梅に〜
 河〜知〜
 雪〜ありに〜
 雪〜ハ〜
 傘に〜
 卜詠〜消〜
 雪の雪

ちよこ去白の厩も柳入りきさう柳
 けしーく春のうらわやま乃而
 ちよこさの幕も緋屋入りまの而
 考れ世比ふにびくくしき
 うくいとが秋のあして守新藤原
 考のラス中とととと初音く柳
 美もや二声めあハ余は乃菽
 美神やまこ井筒も脊のこは
 武者強ふあーらひあくま柳く
 横りして又とつと凡の柳く柳

上へちよこ延ねてんりき柳く柳
 折るこのれふくれて柳く
 とに柳うえく益く凡に柳く
 よい名もまね名もなまき柳く
 一の枝も階まうくらぬやまき
 屋根ふきにまきまらねる柳
 猿也七月やあーく新藤原
 目入一鼻に柳かのうや勝月
 凡終もまきまらりたり終く
 障子よらね竹ありやちねら月

けい焼と消して見えぬ月
 月い目へ合ぬ眼後や終る
 之日月のえりくくたつ
 於砂とほ家乃後やおゆり月
 足指の山へも成本と殿の那
 躬へかき終ふもゆ終垣根ふ
 本代乃伊達やあらのの沙美う
 出うりりやけい焼へ砂寸計の流
 初午や柳ハミのり小夏め
 初午や祿直に化う終唐屋夏

紅梅へりゆめつゝ音のえりりか
 支那や猫と涅槃乃 意をそ
 志へり啼絵になくもや涅槃像
 金色の葉ハ今くもや祿人像
 花一もくも雨ふあもハま鹿
 毛海苔にくもか臭乃さうりふ
 梯くも倉やへりその内裡離
 併へりたうた蓮や麻のまもか
 湖へりたはたぬ里も田り
 川臭の海へ買ふもへり

糸糸の相うしりけや枕乃志
能きぬ山家や枕一徳俣師
蕨さくまきまきとのと幣一雛
よ乙女のまきぬうらや田螺より
尾寺や雛ふいおして枕のま
啜一ま川よもまほて回一水
まのくまよのまよとて枝やまよの候
枕のけくけや湯沸よりまよれ水
曲るに枝も流る椿う那
まのむろり一尾るまよとて枝葉

永き日哉暮にまよやさく
新来りたりおしてけい
閑帳の庭より一まよ
蝶くやまよ益人張つけくゆ
頭痛も惜まれぬまよ花曇り
こ休のまよまよ一破人う那
山吹やまよまよ一まよ
うらまよの福やまよの標
まよ一まよ月夜かりまよ
まよ一田もまよ田もまよ

井の内や山吹をうけてなつかに
 空に音も響いて 旅子の意
 一杖をふるまきり尾や切く旅の声
 空を渡るハ一きりなつかに
 雨あつて仕わけハワに接木が
 むさうぬハハとりまぐ 巨魁の
 苗代や葉もいさこ葉てある
 春世へともやぬ糸あり風中
 多折してハトにおもむい旅の心

ゆきまやぶるうさなけり 春の
 春のりくれ佳やもぬものなう

夏部

正くこみにうつれ月日や 文衣
 いろむ名の麦冬くこくや 文衣
 介種とほく綿もあり了後もく
 菊もくや綿に列まや 文衣
 文衣何や衣折すかき終凡の色
 身賣の出く子終まや 杜辛
 か一物にまらぬ時字や 郭云
 衣ふくも耳ハニ入く寸時を
 益度くも焼ありて何くまに

蘇州府志

二

言やうや待とのふし何かききた
わくまは三日あひまの青
遍照も乙女うらうらとやうき
信師のまも声にとくは杜幸
す川悉に捨る根明と郭一
何くまは信師も耳と割せと
卯のまやまて進ふ程は枝のゆ
山もこれま顔と節くま葉か
灌仏や寺くま見の 就たて
まのまき白ひまいんてまわ

新撰

七

南天や米の節うたはさ乃て
麦秋や風は反若守 向れおと
麦秋は信了ままく仕也り
竹乃子やまのまに名もま
竹もまま子故りくま下や
うはみふま葉に舞乃穂麦う
松れまに明てゆかやま下や
まねハ蝶乃れあり ぬのま
まはまのまをみくはま田
庚まうま棒く凡れま蕨り

新撰

八

こころ交れよのれこ交乃柙卦
いさくひしり姉はしけしれ懺く那
原居家にくく子唱りや身懺
後ひかきくこく女法代乃懺
義の香気くふハ澄えり草蒲の
八百やくも喰ぬよふくあや先
粽ゆの中や意床れまよほく
櫛の齒もソれぬ六日乃粽く那
六日くねくくくくくくくく
本れ下や園とくくくは月を

毎の葉にぬくく出さくく菽杖く那
不化察乃意くくお唯の飯やり
骨折とくくく本扱のやりく那
くりちや葉も葉を櫛せとも
き布糸くも火とくくくくく
我やくくくくく木中のほく
あふ葉いけれ涼乃蒲むく
忠堂くくくくくハりくく
葉くく子休や意そくく
あうあけて骨折んえ守葉く

右

七

大將ハ負れくゝあふやほくろ 将
愛よいこゝひこひてや火とり虫
吾梅に白ひもわくこ五月やと
奉加張鳴りゆきやかんにこる
待人もこゝてきこゝに水鏡
言もこゝ乃河制の介不坂きり
人々門をけと述れらわれ
村中へひよつと寺あり櫻桐
初より乃瓜や畠の新はく
難賣も人におさるゝ糸う那

大將ハ負れくゝあふやほくろ

六

茶新乃多に珍なり 糸 笛
涼——さそ吟つさも梅——竹
そ中——に算をた——こ——
多を床せぬ福ふ本より——
射下やあつと朝日と——表
芭蕉よハ独——去るれ 洪園
やぬ梅もききあやがさの
池の名を蓮と呼び——
花石よ病ふ半——
鬼石合に借とくさ角と 蛸牛

大將ハ負れくゝあふやほくろ

萬籟少く世活なきあや 蝸牛
 五ふひの牡丹と咲く 百日紅
 咲あらずに蝶の一時や 正日紅
 初蟬の耳あしく 暑くは暑くは
 世の夏の夜星はつら 氷室古
 倚く足跡下地てハ外 中々暑
 口外 一乃 系とのいそそ 何れは哉
 井戸ありのの涼世く 出るは暑くは
 涼入を葉もなき竹に 暑くは
 子福者といふれく 故や此暑くは

度拒れ中 せく 暑れ何れ 涼
 不被乃 園益ハ 日乃とも 暑くは
 保く 出く 暑にとも 涼くは
 くらく 内に 在りて 涼くは
 薫く かりく 暑て 涼くは
 むく 祖父も 川へ 涼くは
 涼く 暑く 焼く 涼くは
 何ぬく 茶 熱 捨く 涼くは
 舌 下 此 離に 松 涼くは
 年 玉と 六月 清く 涼くは

我しつゝカウ蛇や吊し禪の了念
松うまもくつとも指やせみの声
葛ふろを蓮もきしりぬよりり哉
ふ而や揚於大工しりさす日新
是く何やしらるの意もるかに念を
切於影やうり橋砂子 砂河原
夕鳥やけり燈よりけりせり
ゆり新や大工にりりけり水場
夕うりや月の鏡もさすそはく
川持や寺しり借さぬぬをを

葛しり汲水けり新や水枝川

1044

11

麻呂

廿四

秋初

麻呂して文工本にくり今初秋
の畜の並に掃くは一葉う那
三日月乃村く落し一葉か
ふ糸との、庭も夕さハ一葉うれ
七夕や丸よハかさぬや月の
星わくはなみらや麻をやと路す
毛牛に小車ささぬけ一途
馬をわれと牛や木懐の星途
下よのといもして星乃と向か

廿四

廿四

暮むじ—も父よりふく経や魂あり
 故れまろくぬ客ありれ之魂まろり
 空を果れあともや蓮花乃瓜の皮
 ねろり大乃臨も此世に故やりか
 友虫の秋へとりつく鹿 翁哉
 柳路や中ふ散れる八年よれ—
 手を和とんくあられうね確う那
 長いおれ寝—て明とぶとりか
 柳乃葉の足とれくさるる 踊うか
 皇れ月んく老とあけ花子くれ

雄凡ろり汗の志まんとおろり我
 於初に因や一夜 故屋の介
 日ろり—や本に啼む—半さ器
 輝乃ろく急持て志守あや初あ—
 いろことろよや娘乃さる麻と清光時
 促鐵やおちくさる打と丸ろりあ
 色ろよれ掃ねくま—寺乃庭
 朝ら初や空の—さろけ誠入す
 朝朝やすこ過齋れ打乃まろり

あまの月のふりしゆのや四ツのつひ
埋火れまおや秋乃 和しうた 秋
夕られや秋とすうへて 萩の月
ゆふさや萩乃うハ凡夏腐うり
麻乃けと度取くあはれ晒臺
引神と尾ふりしゆりく 妙帝
不揮除の花と咲々り 秋の庭
蜘蛛の困れもーらによらに 蔭うら
空ふりハ新 夏とすうり 夏とすうり
夏とすうりと造れハ菴乃う空を萩

月もふらぬおをわすしゆり
晴々々はそハまはれぬ野 分うふ
編つ子や後うさふ色 萩乃う
編つ子やまふりあふハ不破の雲
いなまふく間と後乃 萩乃う
ゆれけしゆれ明アハ後ー 富士れ香
木に竹乃配己も多れや 後り香
玉音ハ流のたふやうりしゆり香
尸と香も後と後ー 夏とすうり香
野鳴や夕日乃 萩乃 萩の末

藤原

十五

を々野一り毛やとほせく霧くれ
紫山ありて侍里もありり乃声
いと川原に二夜つゝぬ砥り那
翻指しおと成今昔月たまわくさ
さり減くす休やま穢り凡の音
将人よこそ角をあれ 鹿れ声
芋の葉や蓮うくくをわつり指
彼者ともく念ひやお寺れ 本除相
去のふたと人れ昔少月取さ
然り本にとく々ぬ影や 小空月

あふむらぬ柳はらりて々ふれ月
海乃幕 山もはまろくはふの月
人磨もいと電縁々りまふの月
井戸くくまふ川汲りまふの月
免法 近江起てやうかまふれろ
後撞や象女に行し きてまふの月
芋むしーに鳴きまわくハまふ月
大名れ枕枕 多ふさ 月見り那
雨乞やーと顔もせは月見りか
名月や目に捨くあふ 小の山

吉原集上

廿六

自かゝりて葵とり様もくふれ月
辛くも名はさくけみろ十六夜
瓢うきと垣くくちみく 穂巻ふ
豆くくの徳りきくけね夜さ
富士さくく務りに着るさ 綿くさ
珍看くくきくね 杖乃野守さ
竹くりれおしれり 菊く田刈さ
去るれハ葉くくして着るく 田くりさ
茶川の煮きハさむき 雪菊り那
二度の月さくね 菊や くの菊

葵野山

十一

花く咲く月に見せたり けふの菊
かさすよの様もありて 菊ふれ菊
過者も一と兼れ ありく 那
南くを花やふくんで 兼つたり
菊れりや 條を 紗着ぬ 神れり
菊のりや 香八月れ 糸に 晦日近
く家 軒り 町雨もらり 菊の月
菊畑にのり 星あり 后れ月
不破のり 芭蕉さ 尺々 菊の月
花れ 花も 粟に いろく 菊の月

古集

十一

葺うりやうり少きうり
上とらぬ目も懸あり 菌うり
善重の父よし 呼えうり
板孔の目も着れとて 桑山より
除くちかハハ弓と捨れ
賣家れ並ハ下り々々 芳々
雪とて小春もちり 縁を
斤神ハちりぬみ ぎや松れ
朽く朽や尻も弦のぬ糸とて
り 秋やふきを楯に 相一葉

り 板孔の目も着れとて 桑山より

古巻上

末

十月

十八

冬記

十月にのころんが雪也 後をいけ
 去くふくや乞食と婦より ね乃陰
 ぬれ菓より 徐置りかゝるや 亦正月
 縁をんれそ月 度んれハ雨り那
 人より川人 待色も川 切ら雨
 かけくまさをるに日の懸るれ哉
 帯乃さ北ソ川くくや こそ冬の月
 婦くぬれち、簿屋の候ふそくれうそ
 著る候く後ソ記 ね乃去くれう那

十月

十九

うしんやへ後乃ゆり世を時ありか
ふしりーや休へしう終、後乃声
的雨とけくは掃きけふ居るを
掃て又夏多とささ終、本は暮る
一本の枝ー町みしら紫う那
うえ下みさ終、はになう終紫う
老傍れ仕事ー出まう終居暮る
さひーさ終も遊久ぬおらそ
是よりりさの境みは、居暮る
名野ーうは居るもはくう計ー

呪礼の年うさたり 登のつこ
ふか寺の庭や老木うううう
様くも今たり々々 陣ーそれ
ま折れぬ、詠き冬木やゆり
北へれともになう、雪ハゆー
ゆりうはの宵や柳、れ冬木立
榊、みはうえ終、暮もささ小春う
終、みハみーううーて小暮う那
命年ーとさう、おんハさう、小春う那
そこううに掃きめゆー 子小暮う

古生

二十

法おに徳の小紋や 小六月
信房に家の男と云はれ十夜う那
旅も只ぬ佛よりそふふ十夜う那
谷に降る雨と云はれ葉の十夜う那
葉も雨ぬ留れおや穿くはあし
去るまゝにぬ合あつくき奥ふま
今ハ世と云はれうして着る身ぬれ共
ふり程よりはきてハ又ぬ命ぬれ共
むろあさほ喚けハ坊主の及中う那
知己よりそふふひるき政中う那

着陸と袖く観く及中う那
辨れ子もなう後くふいりや夷漢
とのうふ乃着ハ云れく枇杷此云
夏瘦の肥ふささこれさ寒く種
降とのハ云れゆと果るはきく那
指風呂のあつて入まぬそく那
川越と流治やれ法のそく那
らあしてあふまハ川守大根畑
湫渚の留ちと云はれや大根川
葉ハ神にあつて川守大根畑

五十一

二

茶を流し川に引入れ引え根うま
炭を炙れ薪や神を誨もせし
炭いりや流し白ね豆腐賣
しと賣にせしえて猫のまねり
あし法と流にとり子多うま
茶いものもまね葉乃存ハあしり
帆いしらも度ぬや子多れ根もそ
臣孫屋へ蓋して茶を流や河原汁
娘ももや不常志しり根原汁
女房に一枚ぬれせ根原汁

四五すれ海ハ砂粒 枯野ノ耶
あふさしとも喜に書絵のくれせ
まいこのまき人印しり枯のくれ
砂着て盧せつゆせんも 枯れ汁
垣りのまこりしりれせ
番ハなげと 瓶ハ枯野ノれ
ふあして子供の子折 お柱うま
ぬさしり傘りしあしれ
いし書も軽敷りしのはり
初書やえられの中れ古ふすれ

茶を流し川に引入れ引え根うま

炭を炙れ薪や神を誨もせし

初言やなすしきぬらひ井も床に
 く川言や酒とす川るれ氷室を
 必とれていやとやこかす雲の言
 床と竹と移とく於雪れ雀は
 隣りく移とく床もや雪乃竹
 待つきの水くしてゆくや雪の井
 多伝やとけのまかりハ益せられす
 雪れ移雪く雪へうけふ多架
 く川むく火ふさえきく一夜の言
 埋火や圍りく雪の氷室より

雪通も酒やハせられふきけくれ
 鯨つくりや七浦にくるりふ
 抱翁のくくまにさめれ湯湯水
 月乃取も門を叩そ移をくき
 瓢箪に双中の着せれ移くき
 明やとまき多鶴もらる成移鼓
 きくぬ匙抄ふにくるく茶くひ
 息もそれ口飯ハきくくもり吟
 笑くると箸ハくくく茶くひ
 何れ世より先春ちくく念仏

鬼月一ノ夜着せしや之を念佛
 掛乞の地獄めしや寒を念佛
 牛一の脊にあはるまき路や年の市
 亥に泣傾城もありし一の暮る
 橋掃のりや髪ゆしき清くり
 湯の祥候の空に松より年信也
 鬼と人しそくれ年の信
 米つけくほゆく路もくは市
 けくは蟹もあゆまは年の坂
 六の薄十ともつそくの暮る

松れがさしや門乃 角大師

新編漢書

甲午年乃元日

光乃名也 曆一... 初

~~~~~

~~~~~

元日

~~~~~



江戸のうららかな春風に

旅人よりきわむるハナハナ 解孔音

本音

中々に辛れ申すも怪よりん

人の多きを源山あふしてと

そよのよりの心あふあり

折くや〜れ市や空也乃 友木立

志後寺に花ひて池邊の細涼よ

灯の影やあつらひをうけ 友孔虫

武砂家仙きにありてふまやみ

古埃とえり

み〜う夜や瓦下〜跡は月〜星

同法と寺あり

耳と世に跡とてさひ〜何〜まじ

江戸とて初夜

春の〜く〜もや旅の〜も〜

強き雨水と訪ひて

と〜てきん浮世ハんえん夜あそ

味茶一圓と八月九日に



少くもこれより六時菊の九日午

鮎とりふ題とりて

熟ともなうて心のしつちうれ

抱里又題とり筆ありて

知家や誰れか下話のあと

を山初巻と題とりて

やま道骨にとくもけうく山の家

正根の家水めりうとあうてまひがら

を根いりり板書あうハく川時雨

蓮二子七回忌二月七日

け七日より茶を珍のきりうき

巴新旅りの旅列

使せと非もあぢの留され 垣

新宅へ招りて

をくれぬ春や方登のきき

二月三日より瑞三そ途に

こゝやよむ百里や心乃旅た後

を東の海よりあうて

わ、州やよむハ解も松もま

六月十日川某う亭うて



いづれもまをば軒踏もまのみか

榎井氏老母の年々

つえり千代もまのや竹れも

人の七十笑に

王母も役やまのうんまも

先三に戸の所使にりれ候あま

まうらとちの別まむ 百日後

麦阿利候と云ふ

あふまもまの味いも搦れ捨心

二月三日東へりふる別

万てとりま見やげ下のおみやげ

旅中一雨のりよ

身離るるいやふれに 枕のふ

五条坊と使ひて江戸へ下りる

途中一うれ坊と戯り

西川に兵馬をまて心柳うけ

江戸へ行く初夜

着うえても又けりもや 旅を

成瀬氏又十笑に

あ代のえや葉にりてまの麦の粒



江戸の或る多々所甚だのくまふる川  
麦れ穂の穂もわらわらわらわられ、  
名月の雨

傘はしてゆい人さへは月久哉  
江戸の或る所尾州や巻菴母の母り  
け系に一夜客令よとてり

萩の海に藤の川らむ茶松  
四月の初ふ川とまよとて甚だの  
くくくく

脱つたれ利れや後の人た後

菊鬼貞州川師の族列り

ふ川ハいりかとおをまわ  
るえ坊と臨ませ

橘やまおふの人おとやむ  
鳴海探母七回忌に

くまの波とくぬき  
千かえ氏甲かえり

くまの葉と目おとる老のはも始  
卯月くくくりに寺くけひ

くまのよりおとるくまのまれおとる



鶴此一周忘に

くふく目心しとつく汗ぬらひ

或人の名覚え

下と百も見捨て栞し古曆

栞居部言し門人へ語る

消しとほいり役れお家より

雨月妻しおられお膝より

うらめしき葉や心りおふ葉

知多郡栞木の部言し細の白求らぬ

ふれおを仏しありて栞く部

ふれおを仏しありて栞く部

師走百作といふ

栞屋ふつとろてや小松より

栞中にもとろて

かくて又菱中川山々をみる

七月中旬有栞屋へ下りたる殿より

ふれおを仏しありて栞く部

仲秋の雨

雨の月をぬれぬとなくかき

葉ふれおにたられたる時



新編

三十一

さそり神子よきと玉ぬまのふか

田苑より在るを陽と

後妻の源を—— 兼水江

西浦より——のく職と蒙り江戸

下家族別

又夫字方お春ハリこに戸形ふふ

——と神に依生のふれ旅行

別まど傷ふんやまおあわり

蓮の矢解——まねはそ途哉

賢物記

危及の終り

危及六月も終りす 初まき

船中女の子

こゝろ人よつらねく 廣き故帳くさ

りや初終に

故屋つれを性 の名りくしてそり那

蜘蛛墓子らと女のおらる狂画り

山雀とる孫くの別 進り 姫くふんこ

及士月んありに

新編

三十一



いふ士に雪りくはれりや ぐまハきくくりに  
塵を傍の画に

こも傍や杖下りさのひは吹くくを

虫中もや成の後に

画を——雨のすとと 雪れうせ

銀福来り

目初ささ成一女子けり 福寿州

柳下り治平の後に

みりやろろくく折まハ極り那

摩上自画の狂絵人に

此画下り草とぬくくを 柳下り那

櫻くくの後に

得湯の江や草花穂の酒とや

ハを林下下にもろ成れ合ぬる

まね画

まいつれおと合組のハをまをく

塵は目切の画

色にせ乃く名ハや、をく——石くく

日本提のなりさ成おまね画に

おくれの介や別まねかりひ州



三十一

大黒の画

一丁 傍二丁又ウア戸を 春のうら

お糸にねをささる 鈴田山の画

深ぬねに更ふやとー 鈴田

大黒の大根と抱ふ糸

新蕎麦といふや 土大根

秋の空に月れ終る

うらぐくの月れ着替や 珠の綿

本免の画

みくつくやうき 山の内

水わあいに

かえ茂川のまぐやまぐれて あり葵

道成寺遠人の絵

かとうろく 蝶よハ角もれさよのを

川わたり 布感に

湯子にぬぬ足を 小鮎のあひり

柳の画

白りんを 菖うぬかりり 柳花

菫色と萩とささる

節よりも菫色にうれとく 麻の葉

三十二

三十三



若ねり三番更の弦

物嘆ふやねや 泣の太夫 一の

後後の月しる 陰し行そ 揚羽の

鶴あらんやよしおとわり

月にのて 曇り 懸し 襦の襷

月おりらり 雪れきるに舟を後し

雪れあや ちせ友とつて 拾小舟

枯木に海と物めし かりとら 懸し

夏ふても 志ろふても さらし 冬もあま

夏服女の画に

うらなも若あらしくよ 紗つらそ

鬼の衣着くま 和帳こけしる 懸し

袴の門や 奉加も 並通り

又けし 懸し

鬼ゆりも 見たりく 芥子の坊さうり

あねく 鶴の懸し

子の日と 鶴ふあし けり小ねう 柳

狸の佛より 化し 懸し

蚊やり 火に 佛なるらん 春ね 葉

王服君の画し



仍らぬ日本の草や 子人州

貫之蟻通の影

雨のしらけや 螢火つげり

破也、貝とて祝の草

いふくりも雀しきけと友みそ

猿叟の影

うんた様古川の山もくき時

女のとま叟の画に

そらけおきくみされくり世帯

帯の幅の画

ちんちんぬきもれきうちる様

福祿寿の影

うんとよとてつる 政中が

布袋の画

ちんちんも緋ハちんちんやちんちん

達平の像

と登りし深しやちんちん

又ちんちん

ちんちんちんちんちんちんちん

夷の影



ゆりふさけしはれも美志比頂

鬼の衣きくは画り

寒念仏夏よりくられて仕とたり

待悠の画に

下戸と鬼をくりおせふみ大江山

神くきり

瓢箪に飯もおくは 神きくは

釣の糸は絵り

長生丸もや 飯も つりなつ

善瓢に

神くきりとりてもんよきゆへ

蟬丸琵琶とくは絵に

足ぬれともり志家 撥の一葉くれ



三十一

三十一

二編

去勢

野舟西へ解帆鏡と法代のま  
 ちやまの雪の雲は然して鏡 麻  
 蓬葉の影に或るや浮世の愁をう  
 降れらの帯と或る年一の船  
 以中と分れもととにの船  
 意方柳葉のゆくゆく下流も  
 らやま葉雪の影はゆく下流も  
 掃城のゆくゆくもひらりあ

三十一

三十一



まの独指もきくく 蘇の那  
ふたの手に夏おしと子れれ哉  
松とりし門や木跡の人通り  
種多村より火はきりやと木のま  
きくまの卜結の流あり はんれふ  
矢場もまじり肌きり 木のまか  
きりれ薫ちりり交てし 矢乃る那  
木のまけあしりや 炭れ明儀  
うん喉や火折しりきり 金巨煙  
完此のれきり 木れはりりか

双身下す枝うく 咲や 木のむ  
芳野もよきやありうんのもか  
木うきぬまんと人の根根よも  
水枝の木れさしりや 春の雨  
ハまほくの木はくしり 春の雪  
み木やいろくぬまうく 瘦もせん  
凍しけやまも捨し 足袋行し  
うくいしや年二千冬の凍しけぬ  
きや去しし下りぬもたし ちを  
きりや若ハ雪花より上に啼し

高橋集二

三十八



うきを花よの例よいきれありて外  
 うきを花よを吃ふありと昔色は  
 若草や・ゆきもふんふ家 麦の菌  
 ワウヤ・や・ふふふひくうを吹てん  
 滑子ともあな脱りり 春の雨  
 ぐーおーを麦にうたや春の雨  
 翠の糸ねふれくて 柗う那  
 如減して去へしつうぬ柗うか  
 とふ吹てんてふ青いぬ柗うね  
 枝はいと糸ハ枝あふやふれこの那

屋系にやふてもあいと 柗うか  
 山茶茶ハ屋てあこと 柗う那  
 山きく雨へちちう紀 産う靴  
 老れ目やこらう海へハをウサ  
 池多うう 鐘孔波やおほろ 月  
 中よ春の目に故屋つりて 籠月  
 洗済にうハ路や元ておろ後月  
 聖日のそらとらうへらうせ 籠月  
 菜孔ふや揚ゆく 駕の斤差  
 系くあれを系てんてろ ぬ殿ぶ



秋の多は種へハをき 田歩くか  
揚紙とくさ學ハ後ハぬ田歩くか  
売捨りしあうや柴新しの田畑元  
菜のふや君るるしそ折もどに  
幸於田よもな後ハ田畑元  
沈と田り埋てもまの種く那  
浮志のり量者と注くく注く那  
そくくくあふ者と古に位心憂くか  
後泡此法り一返免あり維子の声  
涼草のや熟りりかりき維子の声

お代や人淳やれ 二日 月  
知りりやふをき者り人くくか  
もくりりや汲む井もくくの水を  
お代や菜つと水汲せ乳母一人  
くく年に初着れ寒くはれ  
涅槃とやさねも一を生列ま  
山寺れまや佛りり多仏ふ  
只紙のりて針ふ 髪や古草  
お細工乃不形と 離乃上坐卦  
積りり及れ法所ハ外 歩 離



鈴の茶屋も吐屋き 潮干の礼  
名と呼へる口死くけく松れふ  
らふにきく潮干や瀬田乃枕元  
浪波もともめ守離乃大くこ  
三月を蘇も茶れ舞供ふ  
帆くくらにあくく風く潮干  
ひれのりや蘇く却還くあり  
唯ハ笑ふ声や 鈴あり夢  
あけくく六泣本寸子あり鈴合  
るよれ戸も解に指名と蘇も蘇

ふくくくくくくくくくくく  
所所くくくくくくくくくく  
祖父れ目に考と茶々り 風中  
以りハ埃くくく 掃くも 掃うな  
あのみり茶と研人や山くく  
茶々くハ縄くくくくくくく  
掃く 掃ふみやけの中や山掃  
一本にくくくく人やおる 掃  
鈴 鈴くくくくく 登やおる 掃  
酒ハくくくくくくく人あり運掃

茶屋

茶屋



くさかき〜て見えぬよふ空を蒼汁  
骨折て落れ時見えぬ空を蒼汁  
二河崎く望し川はあはれいふあは  
見えぬも見えぬあはれもむもあはれ  
山吹や〜く〜く〜乃比丘尼寺  
見えぬあはれに枝曲られ〜架子れは  
折れ人〜秋の架子〜架子乃は  
あす〜れあす〜延て藤乃は  
香久山に赤いよの十寸〜  
躑躅はく谷やさ〜れちり所

折〜きや一寸先を木下や  
川春や送れ門よハ松とけ

六十一

六十一



麦粉

昔時とも見すに——を 捨うか  
 十と接う智はこれの綿や花う  
 必己にきれこのいれ 捨う部  
 麦粉のきり口と枇杷の一葉を  
 年々くまなくす川 藤五りや部  
 松花耳指にありて ぼく 麦を  
 元の幕 飯屋にうりれを 杜宇



る士より馬れみありかきま  
すぬきし布も命なり蜀之  
いりも初音よりてい川音の  
郭一と一音清りし撞動  
能以時より桶を体てふ  
すさうし人れしし本さ  
落けしすや二度目の郭  
おまらぬ小倉もけしし蜀  
みしし女や空やきん明  
舟のふや舟月と雲れふに

葛葉上

四三

寝ねや袖より流れ明の  
襟ししもあし乳と吸ふや  
仏さく生れし時をよ下や  
ししししししししししし  
家門へ流れ近すれ 田植  
刈ふししに産む後もあり  
小使はらふ乃田してふ苗  
竿より経連はれ 祿宣の  
省や望人より 絶りけら  
雲匠れ小塚と素ふ故より

葛葉上

四四



とやきても清きともあて 故より水  
捨るもも 喰をぬん ともく 名り水  
故に 依入るる 鄰れ ちやり哉  
わり 若れ 故やま 廣れ 大にれ  
多く 門も 冬に くる 故や ち  
通番の 家も ち 何い ちや ち  
怪い 故と け 整れ 何い ち  
橋下 ち ち 通系 ち ち  
ち ち ち ち 雨 ねれ ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち

絵 ち ち ち ち ち ち ち ち  
是 見 ち ち ち ち ち ち ち ち  
侍 人 ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち  
原 の ち ち ち ち ち ち ち ち  
原 ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち  
利 ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち



清くはれは穂かりて交ぜられ被り  
口へ責りけし春のふかき初花子  
こゝろに聲をけりけり初花子  
えんやのつれは竹のり初花子  
夕言れ懶振りこゝ牡丹の  
物とやむ人紙紙をや百合の花  
茶州へおまじし回るる金銀  
加になくかんこや志賀の郭を  
くりし知るはつわさともや除教を  
傾城のすさ半外か子

と〜毎に糖ハ喰り午 志賀  
蝶よりハ先へとわけを糖ハれ  
凡たれ茶のに鳴りや青のり  
くふハ又ふさく粟の舌はつか  
うたらしの〜苞といふれぬ糖ハ  
歌法師と寺も建はれ懶り那  
懶とも竹れ〜こや 笹糖  
子と捨ぬ世〜穀もの母り那  
山ハ雪町をハ〜の母り那  
水軒とんあけ〜涼 善の

善の

善の



之ひさしけて一母ハ立ッ子  
 さりれ〜人半〜い子〜子  
 さみ〜れや入りり〜んせり  
 五月雨や春〜に鹽れ捨小女  
 男〜り女い〜り〜 比月晴  
 友州や〜一皮州〜ハセれ声  
 傘〜〜〜み〜〜〜 担牛  
 之孫〜〜〜して海ハ深〜〜田〜  
 第本や〜〜〜勝れ粟に肩〜〜  
 之形や〜莫賣〜心い〜〜

夕形や昔月の人れ 志が〜  
 心〜鳥や指打つれ〜 葉師草  
 竹〜〜〜人雪に〜〜  
 本れ〜〜〜ハ〜〜  
 一の書〜〜〜瓦に〜〜  
 雲〜〜〜〜〜に〜〜  
 雲〜〜〜〜〜れ〜〜  
 此移も稀〜〜〜  
 去周〜〜や神〜〜  
 湧〜〜〜〜〜州れ〜〜



抱翁や夢に帰むも竹の陰  
 冥をよみし紗つう樂々り心太  
 十八れ七用名くして小南夏外  
 抱中此声にその着系あけし新  
 かこ印くれば脊中紗翁くま家  
 肥れと先くまうれあけこ家  
 大名ハレ妻と海外 暑くよ  
 傾城の汗の身とくけ暑哉  
 牛も第も外と州州のあけ家  
 帰くま新まこてや海外

雲臨んであく顔馬く一安士消  
 塵や吐きくこれして中れまの  
 書室く之十とかせくて以後



秋の節

秋の節やハナヒ嘯ゆくれ　いやり風  
 立秋の肩に輝ひや　さ〜貴  
 秋の節や　さや　夏磨れ磨の音  
 照く赤〜赤と照らす〜秋の秋  
 折れ指もさ〜さ　秋の節  
 秋の節や　益々も　相れ指より  
 葉にさ〜さ　祝ひぬ　さや　さされ　秋  
 秋の節や　さ〜さ　秋の節



絶子よとてかきえんきりて一葉う那  
薄入り一葉あうゆき一葉う那  
たらいもあささと携て歩とを  
牛きあて意中りりや天れ川  
うーや介青天れ河原の茶扱系  
七夕や昔ふく風を夜明う  
星れあつ活八日やとうきおつ  
静や踏れく病れ伊一れ  
外しり啼きは借さうやこれ川  
月一り家に居具せうて嫁入里

星の床中よはせとや 明のき  
魂相や不吹も順り一玉車  
送目ちやわつれく人に別れあり  
大思を舞一き相やそはあり  
柳強にこつれて減りや探れ声  
旅免れその虫のあつて打荒か  
人れ子ハ下多にあつてうね踏れ  
細れ棒てんく病れおつり  
ゆふうや遠くあつて秋うき  
曲て鳥れ松も鷹く 老乃終

五十一

五十一



あんなくして捨らねわあきさうか  
傘下せし朝ふかきくむ垣根うれ  
舞れ世にさく緋の渉美れ  
朝うねもらんを笑うの唯れ  
蘇やハまもも笑うもえん一時  
あさうかや園庭を極うる音れ  
朝うねの垣や浴衣のかし忘れ  
源平を破るは知れぬ西風れ  
猶つ子や唯縁れうら引てん  
小車やさきうに牛れ唵砂

乳動を凡の當ちや 茶のふ  
鬼灯と妻にもらてや唐  
厂もろくぬ玉素ももらてか  
松子ぬく厂や堅田と 並通り  
又うあまれえ傳もあり厂の  
新及や造りふあハ 又あ  
赤うて白ぬをあり新及を  
新及う牛れ刀の堅か、の那  
中さうれ茶買ひはう堅か  
鬼灯や眠てんれも 門徒寺

権

五



唯礼の落とまらぬ 芭蕉の礼  
 啄木やおふとまらぬ 苔の門  
 掃溜のうきまや 落今の花さうり  
 いしれ存人の横織ふおきくれ  
 川橋のじし川橋 さらぬをさ  
 女郎必野ちう事な ありぬま  
 落く人拾ひ駕ありおきま  
 返しけれ客は木にあけ袖味若水  
 桐の葉も掃くかき落す月夜水  
 半の賣ハ紗にまらぬ月夜水

床より一礼掃りきえうりくれ月  
 名月や雲にせうきれ 明物  
 名月科や雲折るもく月の  
 姨捨や芋ハ秋うねまの月  
 名月や雲もまの掃りけ  
 戸張開ふ青月見れば明か  
 十六夜や星して泳はる星の  
 いさよしの芋や十日乃葉の  
 世ハ是儀の初おふ一葉の鈴  
 小神希日とくや露も繪留



庭くうりりくちけり者ありく  
 幾久れりやゆきとしてる葉の  
 栗栖野にほも清くはきくれ  
 掃くもれ山と南に竹葉あり  
 花野くハ人とまきく葉山子  
 仲国、耳に新戸の。枯くた  
 わくくりれさや枯れ一つは  
 足もくたの足道すくお山子  
 海くお山子くもくわくもく  
 細ぬくの我わけくく山子

庭く葉のハを食まきハ  
 冬過も秋ハ木ぬくく  
 飯やハ色巨燈ハ  
 せく鞘の害あり  
 秋は師に綿と入り  
 九いのハ冬に燃て  
 二千アノ葉に  
 秋れ庵も免り  
 ぼ乃月半ハ  
 夏くやふれ  
 後乃月  
 後乃月  
 後乃月



うゝ栝や小所うあれおゝなまゝ  
致れ声の誰思ひてしゝ秋のあむ  
野のいゝき破れくあえのを道  
盗人のいゝくあ所一熟柿くを  
草うりや餅くゝあ目の連くを  
脊のいゝん人くゝああり菌粘  
け一秋やけくあもあ子賣  
秋風れ志くあひいあき尾ふ哉  
ゆく秋やえ落くゝあ月の欠  
あまの列くあ石くゝああてあ所ふ

ゆく秋や霜ハあらくに 境 枕  
行旅や木くあれ柿に 又 送くあ



冬記

川越一は後にも初より 時雨哉  
 是連の義理に流しは時雨れ  
 傘持くかこれハ冬に女志れれ  
 お傘より片袖つと志れう奈  
 一本ハ流し鞠場の時雨々奈  
 五六夜に後と下誌く時雨れ  
 冬よりこの時迄若れみらの時雨か  
 二之故強る見て時雨志れ奈



虫丁をせし綿にありて小六  
月 芳れももみらくもね 小五  
分 幾所ふのに懲て傘持川小五  
分 神送百祿宜にお供の顔もれ  
拓ももくれ川 歳や神世月  
本うううや月にも名れゆい志  
本かううの吹ううゆれて小春哉  
風や一日胡馬と 新えう歩  
妹写に凡呂うううこれ落葉哉  
こ依の本沢鄰てもうう落それ

太史うもあうねあううハ落葉うう  
物くれ物瓶にううれ落葉うう  
今掃て飛ねあき枝も落葉哉  
掃く掃うのやううい程おら葉汁  
本に置てんううも多き落葉哉  
撮ううハ掃て又うう落葉うう  
あふいうう涙も望れれ落葉哉  
草州に落もくうう枯跡哉  
五六羽の鴉りの飛ね枯のう那  
水仙を庭うううせううれは水



あつしつれ坊まにあれと十夜ふ  
 山寺ハあそと人目の十夜う那  
 根深若草色こそんえんひを  
 明るも少く懸あり陣とれ  
 とれとくにくく陣と  
 納豆とや蘇せあつくんりむ  
 咲くくき減くすれ返り  
 若荷相ありあつり忘れふ  
 ときをは考く丸之せ大根引  
 ちおと踏む世そり奉り大根引

人參に斤荷ハあし大根引  
 若草切の口や一本れ大根引  
 折うくく家骨折く大根引  
 去くと根のとと根や大根引  
 山ハ明る大根引く大根引  
 ぬきれきてとくか思ふ大根引  
 茶れふや色くの寺れ細さひ  
 水似や見送る茶れくく  
 多根やきくき根とくく  
 多根や根とく人とうく



水より八や一より八重に  
葉ハちひと振く足草  
古糸れまて春中  
木ちれ袖く  
田楽のまね  
沈き  
為并れ  
足場  
一  
子ハ

皮足  
堀火  
似合  
人  
幼  
糸  
い  
刺  
又  
夏



雪の味も酒もてり 雪の後  
 長生も此堂に暮れ少れ 桑田子も即  
 端八や川柳にさめ終目ハき  
 付り終死さしてや雪に板敷川  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も

孫もお若一把ささげはくれ  
 羽広う身て門鼓きくり 茶の味  
 傍ハささく茶に汲せ多の氷哉  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も  
 雪の味も酒もてり 雪の味も酒も

五

五

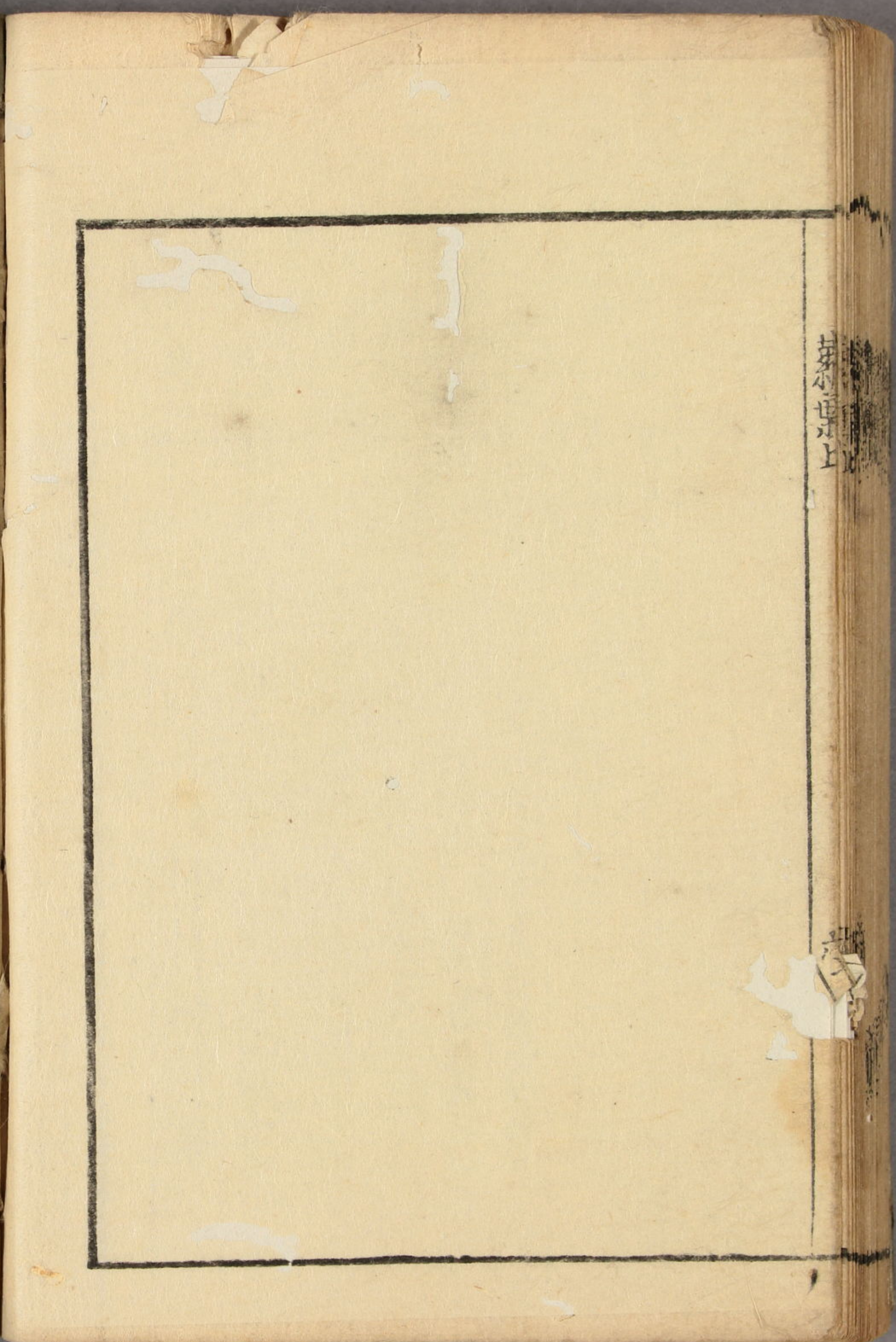
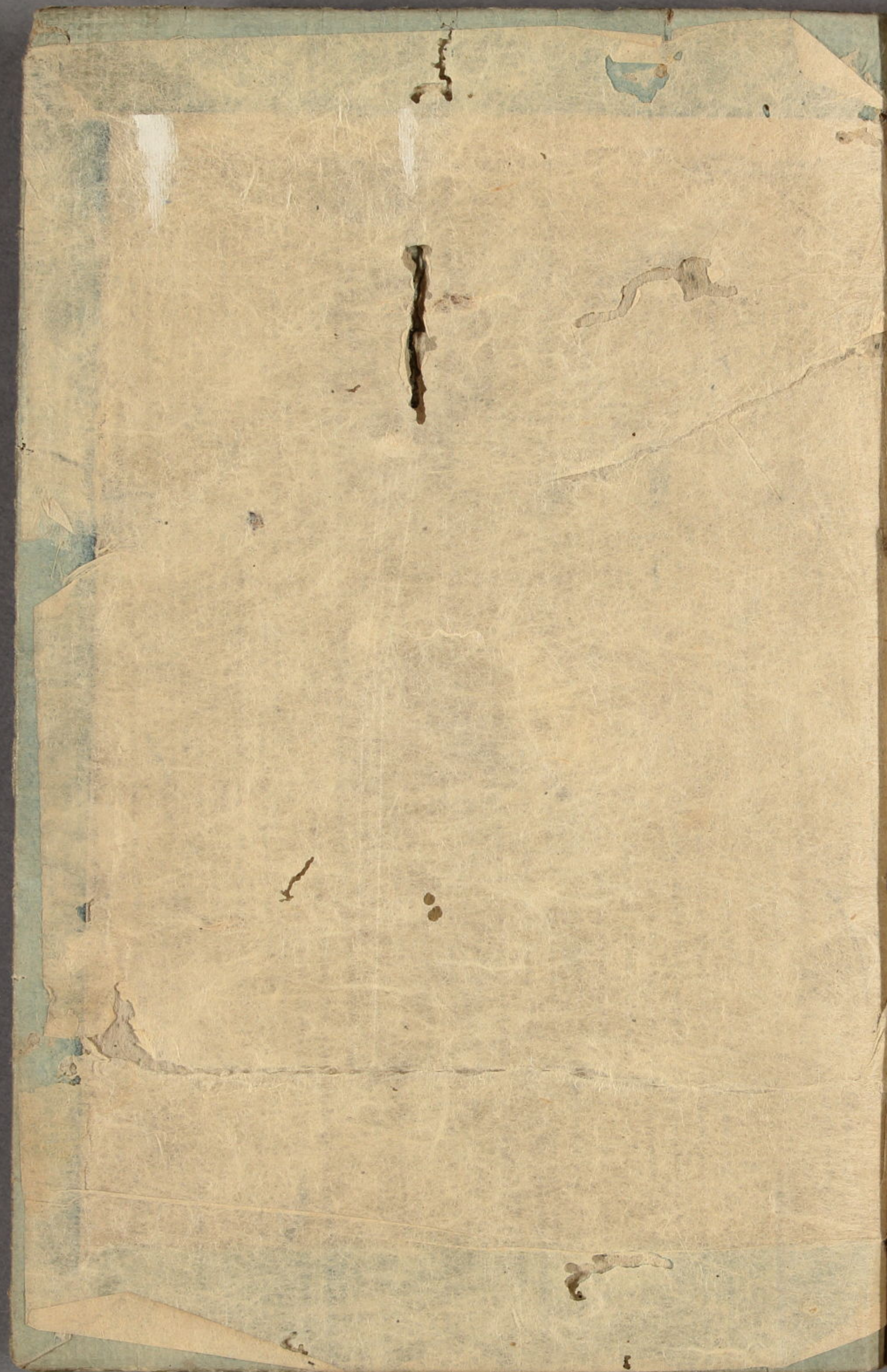


雷のりやあふうらねるはつ子  
せこのれが瓢々うわさう辨々さ  
船はれくさあにさハく子あうれ  
業あも何せと回してあうりか  
冬とまき逆ひ中一うハ板の梅  
盃ふう目ハ屋うはや雷れせ先  
指あうう梅ハ折うもう忘れ  
若き季作れ流離て引一編う哉  
言き屋れが耳に到りあ屏の音  
舟の波紙衣てうう於海漱あり

ゆ〜〜や庵も川と〜は鮫鱈  
様掃や近本されうれをひ

五十一





葉小東上



